宝探しの旅にでよう!

ザ・ハタカラ コレクションズ

「ハタカラ」探しの旅にでよう！

四国の南、高知県の西南部に位置する、高知県幡多郡。
6つの市町村からなる、四万十川でちょっとだけ有名な場所。

実はここにはたくさんの宝物が溢れてる。
でも見つけ出せるかはあなた次第。
まずは目の前の景色を目一杯吸い込んで、気の向くままに歩き出してみよう。
必要なのはインターネットでも時計でもなく、ちょっとした好奇心。
無邪気になったあなたの目に、幡多の宝「ハタカラ」の輪郭は見えてくる。

さぁ、宝探しの旅にでよう！
あなただけの「ハタカラ」を見つけに、あなただけの幡多へ。

目次

04 四万十川を自転車で走破した女
06 川のハタカラ
08 海のハタカラ
10 はためーきーず自己紹介
12 山のハタカラ
14 味なハタカラ
15 空のハタカラ
16 ハタカラを見つけに
17 はためーきーずギャラリー
18 おわりに・編集後記

「はためーきーず」、「ザ・ハタカラ コレクションズ」とは？

四万十川や足摺岬を擁する幡多地域では、日本ではじめての、新しい発想の“自然体験博”とも呼べる『楽しまんと!はた博』(2013年7〜12月) を開催。その中で、ふだん大都市に住む若者の視点から、幡多の大自然、地域の魅力・価値の発見と情報発信の可能性、旅行を通じての大都市と地元の人々の交流、学びあいをめざした「幡多7DAYS 首都圏大学生（情報発信）インターン塾」という体験プログラムを実施。公募・面接で選ばれた10名のマスコミ志望、地域情報発信に興味ある「大学生インターン塾生」が（自ら「はためーきーず」と命名）8月5日〜11日の1週間、国内最高温度を記録した四万十市の下流域で生活。自ら個々に取材、情報発信に挑戦。そしてメンバーの自主提案により、本冊子（「ザ・ハタカラ コレクションズ」）が企画・制作されました。

この冊子の楽しみ方

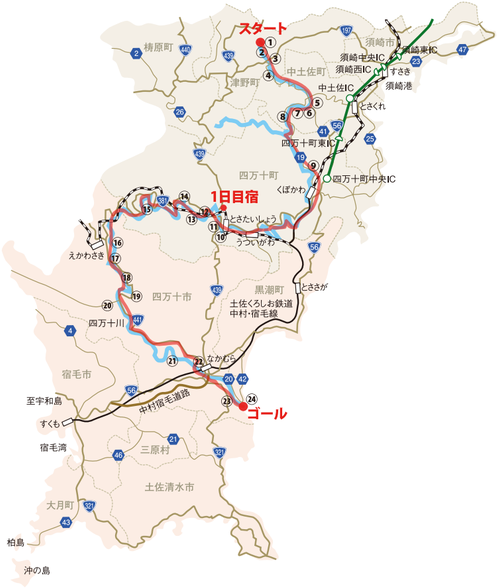
①ハタカラエッセイ
はためーきーずが見つけた「ハタカラ」が詰まったエッセイ

②はためーきーずの野望
幡多をもっと魅力的な場所にするためのアイデアを提案！

③ぶちコラム
幡多で見たもの、感じたこと、考えたことを短く綴ったコラム

四万十川を自転車で走破した女

大学生インターン塾2日目。翌週（8月12日）、四万十市（江川崎）で41.0℃の日本最高気温記録の予兆として、すでに8月6日も体温以上の暑さを記録！安全のための連絡・監視体制をこっそりと整備。モンスターみのりんのチャレンジがスタート。仲間の大学生の誰も見守らず自主活動（笑）



みのりん（モンスター）

1日目（2013年8月6日 最高気温37.3℃※）

①源流点へ

源流の碑から源流点まで片道30分の山道を徒歩で登る。意外にきついけど、私にとっては準備体操。

②朝10時頃、ついにスタート！

まずは約30分の下り。**ずっとマイナスイオンが続く感動**からスタート。やがて右側が開けて壮大な景色が見えた。

③くの字に曲がった沈下橋

走って30分したぐらいで出会った。珍しいけど今は使われてない**沈下橋**みたいだ。

④山と田んぼの緑を楽しむ

ゆるやかな下り、細い道を風を感じながら爽やかに走行。川は見えないけど、緑が楽しい。

⑤左手に石垣、右手に四万十川

とてもとても綺麗な道。テンションがあがって、暑さなんてどうでも良くなった。

⑥四万十川の色が変わる

さっきまで真緑だった四万十川に青みが。山と空の両方が川に色づけしている。

⑦壮絶な登り坂を30分登りきった先に

遮るものが何もない。四万十川を見下ろしているのは自分だけ。独り占め感が溢れる。

⑧四万十川が開けた

はじめて四万十川の大きさを実感した。水面には空に浮かぶすべての雲が写っているかのようだった。

⑨川の流れが速い所へ

はじめて見る四万十川の豪快な姿。自然の恐さみたいなものを感じた。

⑩1日目のゴール、大正（松月荘）に到着

午後4時半の柔らかい日差しが四万十川に降り注ぎ、私は田畑、山と織りなす奇跡の絶景を目の当たりに。私の到着を祝福してくれているようだった。

2日目（2013年8月7日 最高気温38.6℃※）

⑪9時出発、昨日のゴールにお別れ

朝の新緑の緑がわたしを見送る。同じ景色なのに時間が違うだけで全然違う。昨日より暑い。

⑫四万十カーブ

四万十川のカーブは本当に美しい。カーブの先の見えない景色がはやく見たい。

⑬川をも圧倒する空

下流に差し掛かってくると、平地に途端に空が存在感を表す。クレヨンの水色よりもっと水色。

⑭四万十川くねくね

細かいカーブがたくさん。川辺に堆積している小石は真っ白で、砂浜ならぬ石浜。

⑮「道の駅四万十とおわ」に到着

スタートより１時間。特産品がたくさん。自転車にも力を入れている地域らしい。

⑯沈下橋と普通の橋のコラボ

新鮮な眺め。沈下橋がどれほど川に近い橋なのかが一目瞭然。

⑰自転車パンク!!!

笑えた。四万十川沿いにはたくさん自転車を借りられるスポットがあるので焦りはなかった。**「カヌー館」**で自転車を借りた。

⑱「岩間沈下橋」

自転車ではじめて沈下橋を渡る。橋の上から見る四万十川は何倍にも広く感じた。

⑲かようおおはし

山道を抜けると真っ白な橋に出会った。橋から見ると四万十川の色が左右で全然違う、なんでだろう。

⑳「黒尊川」に寄り道

四万十川と並んで有名な黒尊川で少し休憩。四万十川の大きさを改めて気づかせてくれた

㉑「佐田沈下橋」

さこやの駐車場から見る佐田沈下橋はほんとに綺麗。ここでの四万十川は空の色をしている。

㉒サイクリングロード

ゴールまで20キロ。綺麗に道が舗装されていてスイスイ進む。

㉓カウントダウン

四万十川左岸まで20メートル置きに看板が立っている。溢れそうな想いをこらえながらペダルをこぐ。

㉔ゴール!!!!!!

明らかに、川の色が海の色になった。右を見ると川なのに前を見ると海。達成感と感動で胸がいっぱいになった。

※四万十市（中村）最高気温（気象庁データより）

四万十川サイクリングをされる方へ

自転車は自然と一体となれる素晴しいツールです。左側通行、トンネルなど暗い所でのライト点灯、手信号での合図などルール遵守を心がけましょう。特に四万十川沿いの道はブラインドコーナー、狭い道が多くありますので十分注意。こまめな水分補給、エネルギー摂取、休憩も取りながら楽しい走行を。

小菅 隆さん（高知県観光コンベンション協会）

みのりんの野望

スマホ用アプリ「みなしま（仮）」～みんなでつくる四万十川サイクリングまっぷ～

四万十川の美しさをみんなで共有するためのアプリが欲しい！その名も「みんなでつくるしまんとまっぷ」、通称"みなしま"！GPS機能を使えば走行記録だって残るし、スマホで写真を撮ってアップすれば四季の四万十川を見る事もできる。みんなで四万十川ひとつの地図を作り続けるアプリは、四万十川を自転車を通じてより多くの人に親しんでもらうきっかけになるはず！もうあるかも？でも知られてなければ、ないと同じ。

四万十を走るためのドリンクがほしい

自転車で200キロ走ったみのりん。気温40度前後の四万十川では水分補給が重要！自販機で買った冷え冷えのスポーツドリンクを飲むことができたけど、スポーツトレーナーさんが「激しい運動後すぐに冷え冷えを飲むのは体に悪いんだ」と言っていた。じゃあ黒潮町の「さ・し・す・せ・そ」の「さしす」（黒砂糖、天日塩、柑橘類）を使って、四万十スポーツドリンクを開発しよう！自転車乗りの喉も、幡多経済も潤うに違いない！

川のハタカラ

四万十川の楽しみ方って実はたくさんある。風流に眺めるのももちろん良いけれど、「最後の清流」で片づけちゃうのはもったいない。川の水にもっと近づかなきゃ。中に入り込まなきゃ。オリジナルな四万十川の味わい方を見つけるのが楽しいんだ。

川漁のプロフェッショナルに寄り添う

最後の清流四万十川がすごいのは、漁師さんなどが実際に現役で「川で生計を立てている」ことだと地元の方々に教えられた。そうでないと川は生きていないのだそうだ。頭ではわかる。では、どのような漁が行われているのだろう。

私は欲望に忠実に、川エビが美味しそうなので、川エビ漁を体験してみることにした。川自体がめずらしい環境に普段暮らす自分にとって、漁はまったく新しい体験だった。

炎天下、自転車を走らせて体験場所の沈下橋に着き、さっそく川に足をつけて体を冷やす。私にはひんやりと気持ちよかったが、「最近日照り続きだから、ぬるいでしょう」と漁師さん。毎日川と向き合う人は、少しの違いも見逃さない。

コロバシ漁は筒の中に餌を忍ばせ、獲物が入るように水中に沈めておく漁法。水中に仕掛けられたコロバシの中を覗くまで、何が捕れているか分からないわくわく感が楽しい。私は二つの仕掛けを開けたが、幸運なことにどちらにも川エビやカニが入っていた。

乗せてもらった屋形船で、とれたてのエビに塩をふって焼く。ぱりぱりに焼かれたエビを一噛みすると、香ばしさが口中に広がる。「船頭さん、ビールください!」の心の叫びを帰りの自転車を考え、ぐっとこらえる。漁師でもある船頭さんが「ここには何もないけど、川があるから都会よりもお金をかけずにおいしいものが食べられる」と話していたのが印象的だ。

コロバシ漁では米ぬかを餌に使う。その匂いに誘われて、川の“住人”たちが集まるらしい。最近ではより獲物がかかりやすいドッグフードを使う場合もあるようだが、ここの漁師さんは「川の水質保全を考えるとそういうものは使いたくない」というスタンス。川と共存することを第一に考える姿勢が垣間見えた。

どんな仕事であれ、プロというものはかっこいい。四万十川の漁師さんもその例に漏れず、よく日に焼けた笑顔がそのかっこよさを一層引き立てていた。(まっきー)

ぷちコラム

東京っ娘まりーな、川を知る

幡多の川はどれもきれいだ。四万十川だけじゃない。透明な川に入ると、砂利が足にあたり少し痛かった。足元を見ると、小さな魚に気づく。ゴーグルをつけて見ると、もっと賑やかな世界が見えた。

今度は橋に上って、思いきって飛び込んだ。落ちる時間が長くて息が止まる感覚。大自然で遊ぶのは初めてで、悪いことをしているかのようにわくわくした。ここは都会の友人が知らない秘密の遊び場。水面にぶつかった後のスカッと消える爽快さも最高。しかも海と違って潮でベタベタになることもない! 幡多の自然には、私を楽しませてくれる発見と冒険が待っている。(まりーな)

ぷちコラム

必要なのは「小さな磁石」と「キレイな心」

沈下橋を渡りきり川岸に向かって斜面を降りると、突然小さな磁石を手渡された。川岸に転がる石の中には蛇紋岩という磁石にくっつく石が混じっていて、やすりで丁寧に磨くと綺麗な光沢を放つらしい。なんでも、キレイな心を持ってないと見つけられないとか。私は早速しゃがみ込んで手当たり次第に磁石を近づけた。でもなかなかくっついてくれない。ふと気づくと私は沈下橋の真下を探索していた。下アングルからの沈下橋はなかなかの迫力だ。結局30分以上探して見つかったのは小さな蛇紋岩が2つ。私の心はまだキレイだったらしい。宿に帰って早速磨こう。この小さな石を私の手で宝物にするんだ。(ともよ)

沈下橋で遊ぼぅ!

「沈下橋」はもちろん生活道路の一部。観光客には“日本の原風景を象徴する文化遺産”のような存在。でもクリエイティブな旅にはとても新鮮な存在。遊び心いっぱいの都会っ子学生の妄想は尽きません。

A:沈下橋って悪意あるよね。欄干ないんだぜ。あれ。「いいか、落ちんなよ! 絶対落ちんなよ!」ってフリだよ。だから落ちてナンボだ。

B:だからって、ただ飛び込んでも、ふつうなんだよな。もっとおもしろいことしないと。

C:みんなで欄干に一緒に座ったり、駆け抜けたり、歌うとか…。月9でみたことあるか。

B:まあ、定番は「ザ・青春」か「少年時代」って感じだ。

C:それも捨てがたい。で、みんなは結局なにやったの?

A:「スイカ割り!」。一応みんなが落ちないようにガードしてくれたけどさ、目隠しタオル付き。

「もっと右!右!落ちるなって!」って声援あびて(汗)。

B:見てる方も結構楽しめた。そのあと飛び込んでくれたからスイカの皮、ぶつけてみた(笑)

A:盛り上がってたな、あのスイカおいしかった(いろんな意味で)。

C:スイカ割りだけ? どうせ他にもなんかやったんでしょ。

A:もちろん。サッカーはアツかった! 沈下橋でパス交換して渡るのはタマげた。

B:だろ。リフティングもしたし、彼女とヘディングもね。まあこの楽しみは、サッカー上級者に限る(笑)。あと飛び込んで球拾える奴を用意せよ。

A:んで、橋の真ん中でチューしてたっしょ?

C:地元の人はなんて思うやら。(苦笑)でも結構、絵になるかも。ドキドキするし。月9の世界が何でもあり、みたいだね。

B:あとさ、俺、実は大雨増水中の沈下橋見たかった!! だってその名の通り沈下しちゃうんだよ。安全な川岸でないとダメだろうけど、その時に沈下橋の意味がわかるんだし。

A:いやいやいやいや! 俺も実は妄想してた。帰れなくなるし(笑)。

C:飛び込めないし、清流も見れないじゃん。

A:でもさ、旅ってさ、そのくらい脱日常の楽しみ、考えなきゃつまんないでしょ。

一同同意※1(まーしと楽しい仲間たち)

※1/沈下橋の遊び方:生活道路としてのマナーを守ること。他の観光客とのこと、安全はもちろん自然や景観への影響を考えて、上品なステキな遊び方を考えること。ヤンチャな子はそのまま絶対にマネをしないこと。モノマネはダサいです。

チョコの野望

「身体力行(しんたいりっこう)」&「東瀛妙景(とうえいみょうけい)」

中国人は多様。環境問題が厳しい大都市に住む40、50代の家族。健康にものすごく興味を持っているアウトドアが好きな方。そして、旅でリラックスを求める方。日本への旅行経験者で、買い物、代表的な観光地にすでに行ったことのある2、3回目のビジネスマンの家族をターゲットに、「日本の原風景の自然とナチュラルな食べ物を楽しめ、人懐こい四万十! 」の紹介づくりに挑みましょう! ウェブ展開で小さく生んで、大きく育てたい!

※身体力行…身をもって体験し実行すること
※東瀛妙景…日本にある幻の風景

おがぴーの野望

中村駅=幡多ゲートウェイ駅計画

高知空港から中村へ。バスで高知駅へ40分、そして特急列車で2時間半が平日1日3本。「レンタカー借りれば」って高知の人は気軽に言う。でも慣れない道を運転するのはこわいからむりむり。そもそも免許がない若者増えてるし。高知市には仕事などで行けるチャンスは結構あるかも。だけど、その先の幡多方面へ踏み込むには…。だって山でしょ、海でしょ、川でしょ、星空でしょ。幡多で行きたい所はいっぱいあるんだもん。「幡多へのゲートウェイ=中村駅」! 1日1便でも実現させたいな!

海のハタカラ

見渡せば太平洋。でも見る場所によって色も波の流れも全然違う。全部同じ名前がついた海なのに、いくつもの浜を巡りたくなる。
眺めてみたり、波に乗ってみたり、潜ってみたり。幡多でならそんな欲張りな願いも叶っちゃうんだ。

入野の浜とワガママな私

8月。時刻は午前10時。少し陽が高くなってきた。かれこれ1時間、私は「入野の浜」と呼ばれる砂浜を歩き続けている。
波が届くギリギリの場所を素足で歩くのがミソ。熱を持った砂と時々足に触れる波の温度のコントラストがやけに気持ちいい。時折吹く風になびく髪を抑えながら、私はいつか見た油絵を思い出した。絵の中の少女は白いワンピースを着て、私より少し長い髪をなびかせていたと思う。遠くから見たら私もあんなふうに見えるのだろうか。
なんだか気分が良くなってきた。右手に持ったサンダルを意味もなく振り回してみる。周りに誰もいないから笑われることもない。遠くに見えるサーファーは米粒くらいの大きさだ。たぶんここでなら、どんな秘密を口にしても大丈夫。いっそ全部吐き出していってしまおうか…。浮かんだコトバに苦笑いしながら、私はすぐ左手に広がる海を見た。茶色のサングラスを通して見る海は、ちょっとレトロな雰囲気。陽の光を強く反射した水面もどこか柔らかく映る。この浜に出逢うまで、海がこんなに心地いい場所だなんて知らなかった。これまで味わってきた海よりもずっと清楚で純度が高い。暑さが苦手な私ですら、いつの間にか虜になっていた。
もう2km近くは歩いただろうか。私はふと後ろを振り返った。歩きはじめた場所は遠すぎてハッキリと見えない。その瞬間、少し強い波が私の足下に広がってきた。つい10秒前につけた足跡が波に飲み込まれて消えていく。波がひくと足跡があった場所には小さな貝殻が埋まっていた。まるで誰も通らなかったみたいに美しい姿を取り戻している。
「どうかこの浜がこうしていつまでも美しく在れますように」
私は自分のどうしようもない秘密の代わりに、小さな願い事をそっと呟いた。波の音だけが静寂の中に響き渡っている。どうやらこの浜は女の子をワガママなヒロインに変えてしまうらしい。（ともよ）

チビーチ ～沖の島編～

「この先に出来た綺麗な白浜はもう見た？」
そう教えてくれたのは、沖の島でたった一つしかない小学校の校長先生。自転車で島内を散策していた僕を、心優しく呼び止めてくれた。話を聴くと、元々は丸い小さな石で敷き詰められた石畳のようなビーチであったが、土砂崩れの影響で、偶然にも白い砂浜と化したと言う。地元では有名な話らしい。
美味しい予感がする。
気がつくと、上り坂と下り坂の連続である山道をまだかまだかと言わんばかりにひたすら漕ぎ続ける自分がいた。
急なカーブを曲がると白と青の新鮮な景色が目に入った。空は晴天、気温40℃近く、海で子どもたちがはしゃいでいる姿が想像できるが、誰一人見当たらない。（そういえば、さっきの小学校、机が2つしかなかったな）
白い砂浜に碧い海、見たことのあるはずの光景だが何か違う。ここには豪快な波もなければ、広大な砂浜もない。もしかすると、この場所を知っている人はそう多くはないだろうという感覚がより魅力的な光景にさせているのかもしれない。いざ、白浜に素足を踏み入れてみると、包み込まれるような肌触り。まるで、太陽と風が創り上げたみたいだ。
そして、透明な海。これまで6つの県で暮らしてきたが、こんなにスッとした海を見たのは初めてだ。決して派手さはないが、ビーチの良さが凝縮されている。なんと言っても、この大きすぎないスケールが絶妙である。大人にはほど遠いちびっ子みたいなチビーチ。まるで自分のモノのように、自分の家の庭であるかのように感じられるのがこのチビーチならではである。
大切な人と自転車二人乗りで僕のチビーチへ。そんな青春物語をここでなら味わえそうだ。（だいまる）
～追伸～
そういえば、あのチビーチの名前、聴き忘れていた…。あの日見た'浜'の名前を僕たちはまだ知らない。

シュノーケルのお供にジンベエザメを！

誰でもみんな幼い頃、イルカやクジラ、海の生き物と一緒に泳いでみたいって思ったことがあるんじゃないだろうか。
ここ、土佐清水市の以布利（いぶり）漁港では、ジンベエザメという優しいサメがその願いを叶えてくれる。熱帯から温帯の外洋に住む世界で一番大きな魚、ジンベエザメは日本では沖縄か幡多くらいでしか見られない。もっと言ってしまえば、生簀の中でジンベエザメと長い時間泳げるのが幡多でのジンベエザメスイムの特権だ。もともと、いろいろなマリンスポーツができて、おいしいものも食べられる「気さくなリゾート」という幡多を思い描いていた私は、足摺の海でシュノーケルをするつもりだった。それが「どうせならシュノーケルがてらジンベエザメと泳いじゃいなよ」なんていう地元の人の一言でこの体験にめぐり会ったのだった。初心者5人で挑んだこのシュノーケリングwithジンベエザメ。最初のうちは上手く潜れない人もいたし、予想よりも大きな体に少しびっくりもした。でも大丈夫。イキなおじちゃんがコツを教えてくれるし、乾いた

パックみたいなジンベエザメの皮膚に触れた瞬間の感動を味わえば少しでも長く海の中にいたくなる。暗い海の中で目を凝らすと、まるでわたしを見つけてくれたみたいにジンベエザメが迎えにきてくれた時があった。こっちに向かってゆっくり、ゆっくりと。3、2、1…0センチで大きな体に小さな優しい目の持ち主と手を繋いで泳ぐ。距離感0、数秒間限定の海の生き物の仲間入り。それがわたしにとってのジンベエザメスイムだった。
水族館で魚を見るのなんてたいして楽しいと思わない。もっと「生きた体験」がしたい人は、この大きなオマケつきのシュノーケリングに挑戦してみよう！（まきまき）

まーしの野望

バックパッカー・ゲストハウスを！

最近、あまりお金を使わず日本各地を旅する情報通の外国人が話題だそうだ。「YOU、何しに日本へ？」とか。え！ 高知県って外国人旅行客数全国最下位？ そういえば、幡多で外国人見なかったっけ。バックパッカーはお嫌いですか？ そうです。僕もそのひとり。外国人はもちろん日本人も含めて、僕らは旅先での"楽しさ探し"に貪欲です。情報の発信力だって、甘く見てもらっちゃ困ります。
じゃ、どうすればいいか？ それは多分、いやきっと…

だいまる・まきまきの野望

恋人と、仲間と、それとも「あいのり」で？
～僕らの旅が幡多旅行プランをリアルにできる！～

旅に出掛けるパートナーは友人？ 恋人？ それとも、「あっ、ども。はじめまして」？ たとえば好奇心旺盛な大学生たち。海・山・川・星空が揃う幡多で楽しみを発見する新感覚のあいのりプラン。舞台は高知県・「幡多」！ 決まった場所を巡る旅もいいけど、初対面の仲間と予想不可能なドキドキ感を味わうなんて旅ができる。僕らが立証できたから！ 大丈夫です。もちろん将来、自分に子どもが出来たときの企ても…。そんなリアルな発想を旅行会社の方々に内緒で伝えたい。

Special Thanks

梅本 嗣さん

不眠不"朽"のポジティブ広告マン。はためーきーずのザック監督。

大社 充さん

日本の地域づくりのビジョナリスト先生。柔らかい関西弁を駆使。

松本 和久さん

幡多広域観光協議会の事務局長。はためーきーずのパパ的存在。

幡多の"生の日常"は旅好きに最高!

幡多のあと、北海道、スペイン、サハラ砂漠と放浪から帰還のリーダー「まーし」です。実は僕は、インターン生だと知って親切にされやしないかと、あえて名乗らず活動してました。(じゃないと、"生"じゃないもんね!)そんな僕が見つけた、生の幡多とは…。道を尋ねると、それがふつうだという感じで、車に乗ってくれるお爺ちゃん。川に飛び込みに行けば、「どっから来たん?」「名前は一?」と聞く小学生。長時間のバス移動も地元の可愛い女子大生が喋ってくれたからあっという間。しかも! 向こうから先に挨拶だ!(なに、ここ! 天国!!)すべてが偶然の出会いなのに。きっとこれが幡多の"日常"に違いない。「旅行」じゃなくて、「旅」をしたい人。一度、幡多に来るべし!(早稲田大学 商学部3年)

まーし

出会い全てを大切に。

将来、旅行情報誌を作る仕事に携わりたいおがぴーです。人と自然がつなぐ幡多の優しさを伝えに来ました。体験プログラムや三原村の農家民宿への宿泊。漁港、宿泊施設、工房など、幡多で活動されている方々への取材を中心に一週間を過ごしました。山川海、星空と、素晴らしい自然に恵まれた幡多。だけど、その自然を何十倍にも輝かせてくれているのは何よりも幡多の人々のあたたかさ。色んな人のお話を伺うなかでこの想いがこの1週間で本当にいっぱいになりました。それぞれの幡多の自然そして周りの人への想いが溢れている。だから次から次へと、こんなにも想像していなかったあったかい出会いができたのかなと感じています。また帰ってきたくなる。そんな幡多に会いに来てください。(法政大学 国際文化学部3年)

おがぴー

日本のタカラ幡多を、世界に。

幡多は母の生まれ故郷。私は幡多とのハーフ(笑)です。でも訪れたこともなく「一度くらい見たいな」程度の気持ちでした。

実際に一週間過ごすと、ここは魔力に溢れてました。「絶対にまた戻りたい!!」と。最年長ながら海では人一倍張り切り、四万十川ではリエビという最高の酒の肴に出会い、黄金になびく三原村の田んぼに見とれる私。ずっと大切にしたい人の縁も数々。「こんなに人と関わるのが好きだったっけ」とホントの自分の新たな発見も。今はもう、幡多ハーフであることが自慢です!来春から日本の魅力を海外に発信する仕事に就きます。学生最後の夏、世界に誇れる日本のタカラに出会えたことに感謝!世界中の人が殺到する前に、幡多を訪れてみてはいかがでしょう。(東京大学 教養学部4年)

まっきー

自己紹介

みのりん

キッカケをみつける旅先、幡多。

故郷をよりよくしたい!そのキッカケを見つけることができるのは、とインターンへ応募しました。田舎の「日常」は大都会の「非日常」なはず、と信じ、その「非日常」を見つける旅にしようと思いました。既に注目を浴びているものは、日常化していると想い、自分の目で見て感じようと、お寺を廻ったり、山道を歩いたり、道行く人に声をかけたり、貴重な錦の納札を頂いたり。様々な魅力を感じたのですが、目的は達成できず…。地元を愛し、地元の魅力を伝えたい!という心からの想いがよりよい町づくりには必要だという根本的なことに後々気づきました。海、山、川、三拍子揃った幡多で、脳裏に焼き付いた光景が将来の町づくりの種となりました。キッカケを見つける旅は、幡多へ。(成城大学 経済学部4年)

うみちゃん

みのりと はた、時々、しまんと。

悩める18歳みのりん。興味・関心が毎日のように変化する。本当にやりたいことはなんだろう。幡多へ探しに来た。どうしてもやりたかったことはやり遂げた。四万十川200キロを自転車走破。ペダルを漕ぐ度、様々に姿と色を変える四万十川。何度も立ち止まって目に焼きつけた。で、あとは何を探しにいこうか、と。ある日はたった10分で往復できる商店街に、別の日は小さな町民館に、丸一日住みついた。出会いの喜び、別れの"儚さ"に何度も胸がいっぱいになった。

自分のために見つけたこと。そう、一期一会を大切にできる仕事をしたい。同じ景色、同じ人には二度と会えないかもしれない。だから行きたい、何かを探しに。幡多はそんな気持ちを掻き立てる場所だ。(法政大学 キャリアデザイン学部1年)

幡多の種を、まきまき!

「想像や物語の種みたいな本が大好き」

その思いを胸に、将来出版社で小説を創るのが目標のまきまきです。今回は「新しいタイプのリゾート地・幡多」をテーマに掲げて活動しました。実は、ここでダイビングやシュノーケルをすれば、黒潮の影響で多くの魚に出会え、ジンベイザメスイムなんかも出来たりしちゃうんですよね。整備されたリゾートではない。でもおいしいゴハンや、ゆったりとした時の流れを感じることができる幡多は、私の期待した、一味違うステキなリゾートでした。この冊子を目にしてくれた人に少しでもそんな魅力的な幡多の「種」をまけたら嬉しいなぁと思っています。そして、友達でも家族でも、大切な人とその「種」を育ててもらえたら幸せです。(法政大学 社会学部3年)

まきまき

「感動」を表現できないもどかしさを抱えて

生まれも育ちも、そして両親の実家も都内。私には田舎がありません。

幡多で、「ただいま」と言える「私の田舎」を見つけたいと思って来ました。

クジラを見る、カヌーをする、出逢う人々へインタビュー。すぐ打ち解けられる幡多弁の飾らない初対面の人たち。それが当たり前の幡多での日々は、非日常の幸福な一週間でした。でも、大きな自然に感動しているのに、うまく言葉に表現できない。自分の語彙力・表現力の足りなさが、もどかしい日々。大自然をパンフレットや大型テレビで見ることはできる。でも自分がその空気、光の中に実際にいないとわからない何か。自分の言葉で伝えられるようになった時きっと、幡多は私の田舎って、自信をもって言えるはず。(青山学院大学 国際政治経済学部3年)

まりーな

2013年8月11日はためーきーず&スタッフ

無名の絶景を見つけた夏。

カメラ片手に自転車で幡多を縦横無尽に走り回り、現地の人からひたすらヒアリングしよう。そんなスタイルで挑んだ「だいまる」です。地元のふつうの人たちが教えてくれた沖の島や黒潮町の透明な海。名もない真っ白な砂浜など、想像を遥かに超えた景色とあちこちで出会えました。

僕は北海道・宮城・福島・茨城・埼玉・石川と6つの県で暮らしてきました。でもこんなに心地よい自然に出会ったのは初めてです。そしてそんな自然がすばらしい人々をつくっているのかもしない。幡多には隠された魅力がぎゅうぎゅう詰まっています。地元の人が当たり前だと思っている魅力をどう伝えるか。"伝え方次第でもっと注目されるはず"。幡多サポーターはやめられそうもありません。(法政大学 社会学部3年)

だいまる

チョコ

「無添加」な幡多に、会いに来て。

中国の東北地方にあるハルビン市から日本の高校に来て7年になる大学3年生の張です。将来は日本で、発信することを中心としたメディア系の仕事に関わりたいと勉強中です。自然が好きで、旅も好きで、そして、日本の最後の源流、一番綺麗な川を訪ねるために、幡多インターンに応募しました。

源流点を目指して道に迷ったり、その途中にステキな滝に出会えたり、高原でマイナスイオンがたっぷりな森のセラピーロードを歩いたり、そして、ゆったりと餌を探している黒毛和牛に出会えたり、沈下橋で夕日に日焼けしたり、川エビを釣ったり。「無添加な自然=幡多」という感覚を、僕は中国の自然志向の人々に伝えられれば、と念じています。(獨協大学 経済学部3年)

19歳の夏、表現者への挑戦。

将来の夢は良き妻(笑) 生きている間に、人の心をつつくような表現者になりたいと思っている19歳のともよです。美しい景色をカメラに収めたくて幡多を訪れました。旅行パンフレットが嫌いな私は、とにかく行動あるのみ! 地元の方のオススメを聞きながら、自分が見たい景色を探しに奔走しました。その先々で出逢った人たちとの間に生まれた様々なストーリーは私の大切な宝物です。でもカメラに収められた魅力なんてほんのわずか。本当に忘れたくないものは目に見えないものばかりです。幡多の広く深い魅力を遺すにはどうしたらいいのか。私はその尽きない問いの答えを探しに何度だって幡多へ来ます。自分の観察力と表現力磨き、がんばらなきゃですね…! 女磨きはその先で☆(慶應義塾大学 環境情報学部2年)

ともよ

Special Thanks

はためーきーず自己紹介

神原(かんばら) 奈甫(だいすけ)さん

幡多の若者に元気を注入! はためーきーずの頼れる兄ちゃん。

東 泰照さん

幡多広域観光協議会で働くはたっぴーの良き相棒。

小松 昭二さん

中村の新ロイヤルホテルの有名支配人。四万十川のコンシェルジェ。

西本 衣里さん

高知県観光コンベンション協会で働く、インターンの影の立役者。

山のハタカラ

どこに行っても緑、緑、緑。絶対視界に山が入ってくる。でも、空川海全部と相性が良いから全然嫌にならない。
木のトンネルをくぐって秘密の小川にぽーんと飛び込む、なんてことも本当に出来ちゃう。いつの間にかみんな「ガキんちょ」気分だ。

ミステリーは唐人駄場のテラスで。

トウジンダバ…?
最初にその単語を聞いた時、てっきり奈良時代あたりの古い書簡の名前かと思った。でも私の予想は大はずれ。この四文字熟語の正体は土佐清水市の山奥にあるパワースポットだった。地図に示された場所につくと、そこには「唐人駄場」と書かれた立て看板。四方八方で蝉が鳴く中、私は目的地に向け緩い上り坂を歩き始めた。
20m程歩くと、左手に自然の階段が現れた。かなり角度が急な上、段差も大きい。ボコボコとした斜面に使い古した運動靴がよくしなった。思った以上に体力がいる。ふと視線を上に上げると、木々の間から巨大な岩が見えた。どうやら「唐人駄場」に辿り着いたらしい。パワーをもらいに来たつもりが、私は既に相当なパワーを奪われていた。
山の中なのに、急に木のトンネルが途絶えた。大きな空の下に、3~5m四方の巨大な岩が重なり合いながらいくつもそびえ立っている。どうしてこんな山奥にこんな場所があるのだろう。見方によっては建造物に見えなくもないが、人がどこからか岩を運んできたとは思えない。そんなことは不可能だ。どちらかというと、山肌に岩が不時着しているという表現の方がしっくりくる。パワースポットというよりは、ミステリーゾーン。以前イギリスで見たストーンヘッジと同じ匂いがした。岩の上からの景色が見たくて仕方がない。私は好奇心のままに、ちょっとした隙間に足をかけ岩を登り始めた。
一番空に近い岩の上でうつ伏せになってみる。眼下には一面緑が広がっていた。山の輪郭や原っぱの位置、海との境界線がハッキリとわかる。この場所からなら私でも簡単な地図くらいは書けそうだ。私は体をクルっと回転させて今度は大空を見上げた。この岩はいつ、どのあたりから降ってきたのだろう。尽きないミステリーを飲み込んで、私は自然の贈り物の贅沢なテラスで目を閉じた。(ともよ)

おばあちゃんに魅せられて

トンネルの先に、青々とした緑が一面に広がっていた。三原村。薬作り体験に訪れた。
「ここで、やろうか。」そう言われた場所は木陰だった。なんとも田舎らしい舞台だ。ここ数日は40度近い猛暑。しかしこの木陰は不思議と和らいでいた。涼しさすら感じる。奥にはひっそりと、それでいてどっしりと構えた神社の本殿が見えた。
やがて私の周りにおばあちゃんが集まってきた。総勢7名。猛暑の中で少し奇妙な時間が始まった。一人のおばあちゃんが薬作りの見本を見せてくれる。「こうやってやるんだよ。じゃあ、やってみて」、と。なかなかいい無茶ぶりだ。手を借りつつ、かれこれ3時間、ひたすら編み続けた。編むことと会話することで必死になる。この村に若い人が来ること自体珍しいのか、四方八方から言葉のボールが飛んできた。それを丁寧に一つずつ返していく。でもそのやり取りを笑顔で楽しんでいる自分がいた。3時間なんてあっという間に過ぎていった。
私は今改めて、この村の魅力について考える。どぶろく農家が有名なこの村で私が見つけたタカラモノはなんだったのだろうと。それは今手元にあるこの薬でつくった「背嚢」なのだろうか?これは全て三原村でとれたものから作られている。使う道具も自然のものに少し手を加えただけのもので、自然のものから新たなものを作り出す感覚を久しぶりに味わった。楽しくて仕方がなかった。でもその楽しさを私の中で光り輝かせているのはやっぱりあの笑顔が素敵なパワー溢れるおばあちゃんだと思う。一緒に過ごした3時間はプライスレスだった。そういえば何人もの友人にこの奇妙な3時間の話をした。誰かに伝えたくなる程自分の心の中に残っている。私が三原村で見つけたタカラモノはどぶろくでもなく、背嚢でもなく、おばあちゃんだったらしい。また幡多を訪れたら、おばあちゃんたちに会いにいこう。(うみちゃん)

三原村で探そう、私の"リバー・プール"

「プライベートビーチがあるんだよ。」
三原村の養鶏場で楽しい体験作業を終えて、汗だくの私に囁かれた不思議な言葉。山々に囲まれ、見渡す限り豊かな緑。「ビーチ」なんて見当たらない。
きょとん、としている私を小屋のすぐ裏の山道へ連れていってくれた。道を下りると、そこにあったのは澄んだ淡い青と緑色の小さな川。すこし丸く広くなっている部分があった。まるでプールみたい。水着を持っていなかったので服のままそっと入ってみる。ひんやりと冷たい水が体の熱を吸い取っていく。川の中を覗くと小さな魚が目の間をシュっと、通り過ぎた。
その川には大人の考えた遊び道具がいっぱい。向こう側の山の岩にはロープが結びつけられ、手作りイカダで渡れる。案内してくれた人の新作は手作りパドル。イカダを漕ぐと、勢いよく進んだ。手製でアイデアに満ちている。気づくともう夕方。生まれて初めての川泳ぎのドキドキ・わくわくで、一日の疲れが一緒にすべて流れたみたいで、スッキリ。
ビーチじゃない。それよりも、もっと特別なリバー・プールに出会ってしまった。お手製の遊具に溢れた、誰にも知られていない場所。
幡多といえば四万十川。三原村といえば山村だけど森林率84%の高知県、キレイな川は当たり前な顔をして人々のそばにそっとある。地元の人がふつうに知っている川の遊び場を知り、実際に泳いでみるチャンスは誰にでもありそうだ。
ステキな場所を探す喜び。無邪気に遊ぶ感覚。ついこの間だったはずなのに、どうしてだろう。少しだけ忘れかけていた少年、少女に戻れる。
もっともっと、まだ出会えてないリバー・プールがあるのかな。夏になったらまた、ここに探しに来よう。私の秘密のたからの地図はまだ、広がったばかり。(おがぴー)

おがぴーの野望

幡多で「外国人留学生が日本を知る。」
日本人学生と田舎を学ぼう!

東京にいるロングステイの外国人留学生。旅と言えば、京都、長崎、北海道? いやいや、日本の誇る原風景がコンパクトにまとまった幡多地域も必見です。ホントの日本の田舎を体験し、日本への理解・関心もより高めてもらいたい。国際交流に意欲のある日本人学生もチューター(外国語の補助アシスタント)として参加、自国の魅力を再発見して英語で伝える。私の通う法政大学には外国留学経験学生が多い。実現の可能性も高いはず。大学や旅行代理店の皆さん、ぜひご一緒に!

ぷちコラム

幡多でお遍路、予期せぬ宝

四国といえばお遍路だが、幡多には2カ所しかない。1年間お寺に籠ったからか、異様に興味が湧いた。違う宗派のお寺を見るのもまた面白い。炎天下の中へんろ道を歩いてみると、延光寺からの山道で「マムシ出るよ?」と脅かされた。へんろ道の目印には遊び心が垣間見えた。
金剛福寺では、朱印所の方から声をかけられた。「君みたいな人に持っててもらった方がいい」と渡された煌びやかな錦の納札。あまりの美しさに目が見開いた。裏を見ると…、第185回巡拝?! もちろん市販なんてされていない。私がこんなものを手にしていいのだろうか。予期せぬ素晴らしい宝を手に入れてしまった。(うみちゃん)

味なハタカラ

都会のアンテナショップに売ってる物がその地域のおいしいものだと思ってた。けど本当は違ったんだ。もっともっとおいしいものが幡多にはたくさんあった。何もかもが新鮮。そこからもっとおいしいものを自分でつくったら、自分才能あるんじゃないかってぐらい最高の味がした。

藁焼きとは、カツオを食べつくすことなり

「ほら、やってみな。」
目の前には丸ー匹のカツオ。おばちゃんから渡された包丁をおそるおそる受け取る。こんなに大きな魚、手にしないよ。水族館じゃないのに。おっかなびっくり、おばちゃんのお手本通り、包丁を動かしてみる。スーッと通る感覚。「そうそう!」優しい指導のもと、みんなで順番にさばいていく。みるみるうちに魚の姿が小さく、細かくなる。
ドラム缶に敷いたワラに火をつけ、その上に網をひいてさばきたてのカツオを炙る。手に持っている網は少し重いけど我慢。炙った身をジュッと冷たい水の中に入れて身を締めると、少し香ばしい香りがふわっと漂う。丁寧にー切れずつ切って盛りつけ、黒潮町の海と太陽の元気をたっぷり含んだ天日干しのお塩を少しふりかけて身をたたく。忘れずに「美味しくなーれ。」の合言葉。その上からたっぷり薬味をのせたら名物の塩タタキの完成だ。お塩の“甘さ”が少し香ばしいさばきたてのカツオの美味しさを何倍にもしてくれる。
せっかくのカツオ、1匹無駄なく「いただく」。アラの味噌汁、大トロ部分であるハランボの塩焼き。カツオのお刺身、そしてお皿いっぱいのカツオのたたき。こんなカツオのフルコース、夢みたい。こんな厚切り食べてしまっていいの?…一瞬そう思ったけれど、「いただきまーす!」と元気よく食べ始めると、そんな躊躇はどっかに消えてしまった。
あっという間に、お皿たっぷりのカツオは残り少なくなる。最後は醤油とみりんでできた特製ダレが浸ったカツオ3切れほどをご飯の上にのせてカツオの湯かけ。ダシがたっぷりと出て、ほんのり白く湯引きされた身はまた違った味わい。最期まで全く飽きずに美味しく食べられた。1匹のカツオに色んな幡多の味を教えてもらえた。藁焼きって実はカツオを全部知り尽くすことなんだ。贅沢過ぎ。いえいえ、友だち連れてまた絶対に来なくっちゃ。(おがびー)

作り手と飲み手の三原村どぶろく物語

私にとって旅の醍醐味の一つは、その地のお酒を飲むことである。何よりお酒が好きだし、地のお酒の方が郷土の食べ物や気候に合う。お酒を通して、その土地の人々の生活や文化、歴史だって分かる。もっともこれは旅に限ったことではなく、フランス留学中は毎日ワインを飲んでいた。
「三原村にはどぶろく農家がある」と知ってしまったからには、三原村を訪れないわけにはいかなかった。作り手に直接お話をうかがいながらお酒を頂くというのは初めてだった。「青空屋」の齊藤さんご夫妻は、どぶろくを作っているときの二人の仲の良し悪しがそのまま味に反映されると言っていた。甘くて優しいどぶろくの味にお二人の愛情が感じられた。「椿姫の伝説」の今西さんは、酒粕の美容効果に注目しているという。確かに今西さんは肌がつやつやでお美しい限りだ。私もそれにあやかろうと一本購入することを忘れなかった。
作り手を知り、その思いや苦労、喜びを知りつつ、お酒を味わうということ。正直、緊張しないわけがない。お酒は文化そのものだ。そしてここ、三原村の農家のどぶろくの一つひとつの銘柄は、それをつくる家族の思い、物語を感じるお酒だ。
購入したボトルは、自宅であっという間に家族の喉に吸い込まれた。次は友人たちと食前酒としておしゃれなグラスで飲んでみたい。きっと外国人の友人も喜んで飲む。どぶろくの楽しみ方はたくさんある。冬なら温めて、甘酒感覚で飲むのもいいかもしれない。農家でいただいたどぶろくケーキはしっとりとしてひんやり冷たく、夏のおやつにぴったりだった。そうだ、私はどぶろくアイスを試作してみよう。あのいい香りが口の中に広がったら、三原村の景色や出会った人々の顔が浮かぶに違いない。来春にはパリのパティシエにも届けたい。MIHARA－DOBUROKUがOMOTENASHIと同じくらいの国際語になる日がきっとやってくる。(まっきー)

空のハタカラ

星空を見る。その目的のために南の島や海外リゾートへ行く人は多い。星は旅先選びや旅の楽しみのひとつになる。意外と知られていないのだが、幡多地域の星空も負けないぐらい素晴らしい。ここにしかない魅力がいっぱい!

ワイドスコープ・スターライト・トライアングル ～星空好きよ、幡多へ集え～

270度の視界に広がる、水平線の下まで続く星空(足摺岬)

足摺岬でスターウォッチング。真っ暗で何も見えない中、空を見上げるとビーズの箱をひっくり返したかのように大小無数の星が散らばっていた。運が良ければ目線の下の水平線まで星が見えることもあるそうだ。そんな場所、沖縄の島々や海外でもそうは見当たらない。
理科の教科書でお馴染みの夏の大三角形もはっきりと見えた。それを横切る白い帯は、もしや天の川?! この星空を見ていたら、きっと理科も好きになっていたと思う。
ツアーコンダクターの星座の説明は絶妙だった。レーザーペンを夜空に向け、まるで黒板を指すように次々と星座を発見させてくれる。ギリシャ神話の解説つきだから、余計に星の世界に引きずりこまれていった。東京に戻ったあと、リーダーの「まーし」からメールが入る。どうやら彼はサハラ砂漠を見たらしい。でもその文面には「足摺とあんま変わんなくね? むしろ足摺の方が綺麗じゃね?! 足摺は1時間で3～4個は流れ星見えたぞ!」と書かれていた。そうなのね。なら今度、自信をもってフランスの友人に足摺を宣伝しよう。(まっきー)

天使が降りて来そう。手が届きそうな空いっぱいの星空(三原村)

三原村の農家民宿に泊まった夜。夜11時頃、星空を見に外へ出てみる。家の一歩外に出てみるとひんやりとゆるい風。昼間の暑さが嘘みたいだった。びっくりするくらい静かな夜。誰かの話し声も何も聞こえない。静寂だ。顔をあげて空を見上げる。真っ黒な世界が広がる。山と山の間に見える夜空はわたしの知っている空よりも、ずっと近くにある。手を伸ばせば、触れられそう。目が慣れてくると小さな星もたくさん見えてきた。「今日は雲が多くていつもよりも星が見えないね。」とおかみさんは言ったけど、私はふたりきりでプラネタリウムにいるような気分だった。何も言わずただただ、じっと星を見つめる。いつもより素直になれそうな星空だった。(おがびー)

星羅四万十の星空ウォッチングに行きそびれた私たち

四万十市の北、四万十川の風景が眺められるオシャレな ホテル星羅四万十でも星空ウォッチングができるらしい。清流のそばの小高い場所で天体望遠鏡を覗いて眺められるんだとか。山川海に加えて星空も素晴らしいなんて、幡多も相当欲張りだ。幡多の星空トライアングル、足摺岬、三原村、そして星羅四万十。この3か所は絶対制覇しなければ…!(ともよ)

まっきーの野望

「どぶろく」から世界中に三原村ファンを創ろう

農家が丹精を込めて作ったこだわりのどぶろく。生産量は限られている。急激には増やせない。しかし三原村ブランドとして付加価値をつけ全国に、そして世界に知らせたい。熱心な濃いファンを創ろう。「美しい自然の三原村でどぶろくを使ったスイーツや酒粕効果を活かした化粧品も作り、希少な人気商品を拡げる」。そんなことを考える知恵を集めよう。「高知県に、三原村あり!」と胸を張ろう。そんなブランディング戦略のスタートを三原村に私たちはご提案したい。

ハタカラを見つけに

「はためーきーずのメンバーって、実際どんなところへ行ってたの？」そんな素朴な疑問にお答えすべく、だいまる、まきまき、ともよ、おがぴーの４日間（8月6日〜9日）の行程をご紹介！（夜もマスコミ・情報発信手法や観光マーケティングの共通講義を聞いたり、交流懇談会などもあり、盛りだくさんでした）さて、いいとこ取りしてハタカラ探しの旅にでよう！

	8月6日	8月7日	8月8日	8月9日
だいまる	黒潮町で**観光イカダ釣り**と**かつおタタキ作り体験**に挑戦! **ソルトビー**と**みかん農園**にも行ってきた。	宿毛市の片島港から定期船で**沖の島**へ。居酒屋けん坊で赤いおじさんに会ってきた。	午前は**竜串**へ。午後は以布利港で**ジンベエスイム体験**を楽しんだ。	大月町**柏島**へ。柏島公民館や喫茶店みっちゃん、**龍ヶ迫**を訪れた。道の駅では**苺氷り**を堪能。
まきまき	この日は終日自転車移動! **カヌー**の後に**しゃえんじり**で昼食。その後は**屋形船**にも乗り込んだ。	電車に揺られて**平田駅**へ。**出井甌穴**へ行ったりと、宿毛市で丸１日を楽しんだ。	**大岐の浜**で**サーフィン**初挑戦! 以布利港の**ジンベエスイム体験**に感動!	大月町**柏島**で**ダイビング**に挑戦! その後はBBQでお腹いっぱい!
ともよ	午前は黒潮町で**入野の浜**を歩き、午後は三原村へ。まだ飲めないけど**どぶろく農家**を訪れた。	四万十市を探索。**赤鉄橋**を渡って**トンボ王国**へ。生物調査に同行した後は地元の印刷工房を訪れた。	**大岐の浜**を見た後は、土佐清水市の**竜串・見残し**へ。**唐人駄場**に寄ってから**足摺岬**に向かった。	終日大月町を堪能。**観音岩**や**小さな島々**の景色を楽しんだ。新鮮な**海鮮丼**のおいしさに感動。
おがぴー	黒潮町の**ソルティーブ**で**塩作り**に挑戦! **かつおタタキ作り体験**にも参加した。	**山里の家**を訪れた。**舟母船体験**を楽しんだ後は、**ヒカリネコ舎**に立ち寄った。	三原村で**しゅりの里**を訪問。終日村内で過ごし、夜は**農家民宿NOKO**に泊まった。	**幡多美味工房**を見学。大月町柏島では**大堂海岸**と**観音岩**を訪れた。

はためーきーずギャラリー

沈下橋の上で、ハイチーズ

いざ海へ! ホエールウォッチング

幡多ならではの新鮮な海鮮丼を堪能!

四万十川で蛇紋岩を探せ!

柏島の海で決めポーズ☆

ソルティーブで塩作りを体験

ハタカラ探しの相棒は自転車

おばあちゃんに囲まれて藁を編む

三原村でどぶろく作りを見学

あっさりつゆのところてん

宿毛市の山で川泳ぎ

ヒカリネコ舎でミソ作りに挑戦

川に向かってダイブ…!!

大岐の浜でサーフィンに初挑戦!

おわりに

ふつうに開発されることに背を向けて ～幡多の見えざる魅力～

電車やバスは数時間に一本で、車がないとどこに行くにも不便。大きなデパートはないし、学校だってあんまり見かけない。そしてなにより夏の四万十は暑い。少し？ いやだいぶ。数分置きに出る電車、なんでもあるデパート、クーラーの効いた室内で暮らす私から見たら不便だ。でも、なぜだろう。「また行こう」と決めている自分がいるのは。

その魅力は、採れたての野菜や手作りのご飯が並べてある道の駅のような素朴だけど温かいおもてなしかもしれないし、ゆったりとした時間の流れかもしれない。でもやっぱり一番は手つかずの自然がまだあることだ。幡多の子供達のプールは近所の川だし、海に潜れば沖縄に匹敵する種類の魚が見られる。独特の地形の竜串は自然の彫刻みたいだし、圧巻の星空もある。

幡多はよく「地理的に不便だから開発されなかった。だから未開発の土地だ」っていわれているけれど、本当はそこに住む人々が「そのままの幡多」でいてほしいと思ったから、「否開発」のままなんじゃないだろうか。

どこにでもありそうで、しかしどこにもない場所。

都会、近郊にもそこそこ綺麗な川がある。幡多よりも雄大な自然がある地域もある。でも、幡多の魅力はそのまんまの自然の中でふつうの日本人が「暮らしている」ことだ。だから、食べ物もおいしい食べ方を知ってるし、海・川・山のいろんな遊びを知ってる。そんなところが都会からきた人の心を捉えて離さない。そして「否開発」の場所だからこそ、いろんな宝を見つける喜びに溢れている。

さぁ、幡多で宝探しの旅にでよう!

「ザ・ハタカラ コレクションズ」
楽しまんと! はた博 大学生インターン塾2013成果品

発　　行　　日：2013（平成25）年10月4日
発　　行　　元：幡多地域観光キャンペーン実行委員会
企 画 ・ 制 作：「幡多７DAYS・首都圏大学生インターン塾」
編集長／廣川那佳
副編集長／高瀬真生子
グラフィックデザイン／廣川那佳
企画・制作支援：高知県観光コンベンション協会
デザイン支援：クリケット、ゴーゴーデザイン

編集後記

幡多で過ごした7days

最終日の朝、みんなで四万十川の朝焼けを見た。夜通し幡多やそれぞれの将来について語り合っていたからか妙に感慨深い。「みのりんの弟がまーしで、ともよは梅本さんの娘っぽい」とか、はためーきーずの家族構成を考えちゃったり。友達になってからたった7日間しか経ってないのに、隣にいるのはなんだか小さい頃からの友達みたいだった。日本最高気温をたたき出す程の暑さの中行われた幡多7daysインターンは、最後にとびっきりの「ハタカラ」を隠してくれていたみたい。この自由で挑戦的な7日間と、それを支え続けてくれたたくさんの大人たち、そしてこの幡多に心から感謝するばかりだ。またいつか、10人で来たい。そうしてまた、みんなで四万十川の朝焼けを眺めるんだ。（まきまき）

この冊子ができるまで

インターン6日目の夜、1人ひとりが考えた幡多への提案を発表する時間があった。みんなが旅行プランや幡多への想いを語る中、「冊子をつくりたい!」と、机をバシバシ叩いていたのが私、ともよ。7daysで見つけた幡多の魅力をどうしてもはためーきーず全員で文字に残したかった。忙しい中快く協力してくれたみんなのおかげで、今この冊子は出来上がっている。この冊子づくりを印刷面から支えてくれた野並さん、ヤマサキさん、そして入稿直前の旅行を私だけキャンセルすることを許してくれた友人達にも本当に感謝している。そして最後に、大変な編集作業につき合ってくれたまきまき、そして梅本さんにありがとうを1万回ぐらい叫びたい。2人がいてくれて本当に良かった。（ともよ）

We call 'Beautiful HATAPPY'
arranged by MAKKY 2013

※なお、この冊子に登場する人々の所属・肩書きは2013年9月時点のものです。